



嶋岡晨・大野順一・小川和佑 編

戦後詩大系

I

三一書房

戦後詩大系 I

定価 三、〇〇〇円

一九七〇年九月三十日 第一版第一刷発行

編者 嶋 岡 順 晨
大 野 和 佑
小 川 一

発行者

竹

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九)三二三一と五番

振替東京八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷所 文栄印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所

©一九七〇年

道^{みち}

標^{しるべ}

昭和二十年八月十五日。世界地図を塗り変えるいまわしい戦いは終わった。

だが、むしろその時点からわれわれの戦いは始まったといえる。真の平和と、真の愛のための苦しい戦い、もろもろの欺瞞との戦いが。人間の内部と外部との戦い、個人と社会との戦い、武器なしの血みどろの戦い。

詩人たちは、ことばで戦ってきた。みせかけの美しいことばではなく、傷つき泥だらけになり、絶望の谷間をはいあがることばで。そして内部と外部の荒地を、沃野にむかって歩きつづけた。永遠の太陽をもとめて……。

沃野はわれわれのものになったか。永遠の太陽はみつかったか。ただちに答えをひき出すことはできない。ここに編んだ戦後詩のアンソロジー全四巻は、むしろ問いの巨大な集積であろう。今は、詩人たちの戦場を展望すること、戦果を問うというより、その行為、戦いぶりをつづさに検証することこそ、必要である。

戦後詩の世界は、なまなましく生き、動き、変貌しつづけている。せつかな、かたよった評価よりも、事実（作品）をまともに見すえ、比較し、より正確に、その〈生態〉をとらえるべきであろう。すでに、いくつかのアンソロジーは刊行されているが、さまざまな事情から、充分にパノラミックな展望はなしえなかったと思う。ある場合は、ひとときわぬきんでた美景として評価された詩人たち、選ばれた作品群にかぎられ、ある場合は、ごくみじかい一時期の詩壇群像の紹介にとどまったのではないか。そのことによって、ある編者あるいは選者の主観的判断が、動かしがたいものとして居すわってしまったような例も、ないわけではない。そのため、おおくの読者が、よりすばらしいかくれた風景を眺望のスケジュールから抹消してしまうことも、少なくないのである。詩人と作品の〈運命〉であろう

か。

ときには時間的経過によって、詩壇のリスト上に急速に生まれ消えさる詩人たちもいる。思いがけない大地の震動が不意に新しい風景を生み、また雪崩が、ある風景をかんたんに見えなくしてしまうように。たとえば、一九五五年刊「戦後詩人全集」全五巻(ユリイカ)に収録された詩人名をあげてみよう。

第一巻 中村稔／大岡信／山本太郎／谷川俊太郎／那珂太郎／新藤千恵

第二巻 藤島宇内／中村真一郎／長島三芳／和泉克雄／沢村光博／祝算之介

第三巻 三好豊一郎／黒田三郎／木原孝一／高橋宗近／高野喜久雄

第四巻 野間宏／安東次男／平林敏彦／飯島耕一／磯永秀雄／河邨文一郎

第五巻 関根弘／木島始／清岡卓行／峠三吉／許南麟／長谷川竜生

五年後(一九六〇年)、同じ書肆ユリイカから「現代詩全集」全六巻が刊行されたが、右の詩人たちのうち、十一名の詩人が消え去り、かわって、つぎのような詩人たちが登場している。(第一巻は、西脇順三郎から小野十三郎にいたるいわば老大家だから、省略しておく。第二巻以後がその活動期によって戦後詩人とよぶべき人びとである。)

嵯峨信之／安藤一郎／会田綱雄／鳥見迅彦／及川均／佐川英三／菅原克己／土橋治重／桜井勝美／安西均／鮎川

信夫／中島可一郎／北村太郎／吉岡実／滝口雅子／中桐雅夫／田村隆一／衣更着信／浜田知章／秋谷豊／谷川雁

／井上俊夫／吉本隆明／生野幸吉／鎌田喜八／吉野弘／茨木のり子／岸田衿子／田村正也／粒来哲蔵／黒田喜夫

／川崎洋／安水稔和／石川逸子／岩田宏／城侑／嶋岡晨／中江俊夫／堀川正美

さらに十年後(一九七〇年)、思潮社の「現代詩文庫」のリストを見れば、右にあげた詩人たちのほかに、つぎのような新しい詩人たちが、登場しているのだ。

天沢退二郎／長田弘／富岡多恵子／鈴木志郎康／石原吉郎／岡田隆彦／入沢康夫／片桐ユズル／寺山修司／渡辺武信／三木卓／金井美恵子／渋沢孝輔／吉増剛造……

詩人の数がやたらふえたというのではない。自然淘汰などというのんきなものでもなく、出版社編集部が、その時

期その時期の詩壇的評価のバロメーターに依じて、取捨選択にこそしむわけで、「現代詩文庫」に入っている詩人たちの数は、三十数名にすぎない。どこにその取捨選択の基準をおくか、はなはだあいまいであるが、あいまいなのが当然で、流動しつづけているものを、ある現在完了形的時点でカットすれば、その時点でのジャーナリスティックな評価の対象とならなかったものは、こぼれ落ちてしまうのである。

百人の詩人を、十人にしぼるといふことは、ひとつの見識であり、そのこと自体、ひとつの批評である。だが、同時にそこに、独断的な危険があり、はたして捨てられた九十人が無価値かどうか、という疑問が生じる。しかしながら、だからといって、九十人を、九百人にし、九千人にふやすことが、良心的だということにはならない。むしろ、詩人の墮落にも通じるであろう。そのことを充分承知の上で、われわれは、できるだけおおくの再評価すべき詩人たちを抱えこみたいと思った。それは詩人たちの存在を、限られた批評家の評価にまかせるのではなく、ひろく大衆のまえにもち出し、戦後詩の実態を提示し、より大きな観点から、さまざまな視点によって、より適確な把握を試みてほしいと思うからである。今回の大アンソロジーの目的の一つは、そこにある。

敗戦以来、二十五年たつ。このあたりで、できるならば、二十五年という歳月をこま切れでなく、ひとつつらなりのものとしてとらえなおし、そこに生滅し、再生滅しつづける詩人たちの映像を、できるかぎりひろく、ふかくとらえたいと思う。

きたるべき時代のため、新しい詩の世界の訪れのため、狂いなくわれわれが戦いをつづけるために。

たしかに「戦後の詩について整然たる腑分け、整理をすることは今のところ不可能に近い」（大岡信）。それならば、あえて生きている肉体について「腑分け」をおこなうよりも、生きた肉体そのものにつぶさに触れ、部分部分をたたくようにすることによって、その存在の全体を把握しようではないか。

＊

さいわいにして、このたび、われわれの希望と三一書房の構想とが、ほとんど完全に一致したのである。思いがけ

ない機会の訪れである。

三一書房と編者との協議のけっか、このアンソロジーの刊行が決定したとき、われわれはつぎのような手紙を詩人たちに送って、協力をもとめた。アンソロジー出版の主旨は、そこに充分あらわされているはずである。

「戦後二十五年、現代詩はじつに豊饒な収穫をもちました。すでにいくつかのアンソロジーも刊行されています。しかし、今私どもが狙うのは、選ばれた十数人の詩業よりも、よりおおくの詩人たちの業績の展望による、日本人の〈戦後〉体験の幅広い検討であり、確認であります。すでにジャーナリズムの上ではなやかな活動を示している詩人については、むしろこれを見逃すことはできませんが、このさい、私どもは、できるかぎり埋もれた才能にも惜しまずライトをあて、既成の評価に盲従しない選択態度によって、真に現代的課題に対決しえる作品を掘りおこし、ユニークなアンソロジーにしたいと思うのです。

当然、一思想に偏せず、あらゆる傾向の秀作を網羅し、戦後詩をかたる者が必ず座右に置かざるをえないほどの、貴重な資料ともなることを期しています。」

かつて〈詩集ブーム〉といわれた一時期があった。ブームらしきものの去った今も、かなり広い読者層に詩集はむかえられているし、実作者の数も年々ふえているようである。この現象はなんだろう。

散文の合理性の中にはもとめられない非合理の真実というべきものを、読者は詩の中にもとめている。合理的機能主義がますます徹底化される今日、われわれは、ほとんど本能的に〈人間らしさ〉を詩の中にもとめているのだ。

その〈詩的真実〉というものが、戦後の詩人たちによってどのように表現されているかを考えることは、今日、単に趣味的に詩をたのしむ人びとや、一部の深刻面のプロ詩人たちにとっての課題にのみ終わるものではない。

「戦後」は終わった、という説もある。だが現象的变化の背後に、個々の魂の底に共通の体験として持続する「戦後」は、けっして終わってはいない。そのことは、新しく若い詩人たちの作品の中にさえ実証されるだろう。「繁栄」とか「調和」とかということばとは、ウラハラに、われわれは、大いなる屈辱をひきずって、今も荒野に立っているのではないか。

このアンソロジーにおける「戦後」の総合的把握は、詩をとおして、われわれ日本人の時代状況に対する姿勢をたしかめることになるだろう。

＊

編集にあたってはつぎのような基本的方針をうち出し、その実現につとめたつもりである。

☆ 戦後二十五年にわたって、すぐれた詩人たちの詩集の中から、代表作あるいは問題作を、可能なかぎりひろく選出、展望できるかたちをとること。

☆ 詩をとおして、戦後の思想、体験と時代的意義を問いたず姿勢を、全巻にわたったもつこと。

☆ 原則として、いわゆる「戦後詩」としての体質的特性をしめす詩人を選び出すこと。当然、戦前において一家をなした詩人は省くけれども、戦後詩を考える上で無視しえない記念碑的な仕事をした詩人たちは、検討のうえ収録すること。

☆ 詩壇あるいはジャーナリズムに浮かび上がらなかった著名でない詩人たちも、その才能の傑出した者は、積極的にこれを発掘し、思想傾向を問わず収録する。

☆ 詩人として詩壇リストにのぼり、著名な存在でも、注目すべき業績をのこしていない者は、これを省く。

☆ 収録作品の原典は、特にいちじるしい改稿がなく、定本としたものがない限り、もっぱら初版本をたよりとし、かつ、その流布本の併用をみとめること。

☆ 収録作品のカナ使い、漢字、送り仮名などは、原則として原典のままとする。

☆ 収録作品は、原則として単行詩集から選出するが、例外として、個人詩集を持たない詩人も、きわめて重要な存在であれば、作品を発表した雑誌から採集、収録する。

☆ 詩集より抄出した作品は、末尾に詩集名を付し、その詩人の略歴は、鑑賞をたすけるために、全作品の冒頭につぎの記載順で付す。

- ① 姓名(ルビ) ② 生年月日 ③ 出身地 ④ 最終出身校 ⑤ 主著(発行所、発行年) ⑥ 所属同人誌
あるいは団体 ⑦ 受賞賞名

☆ 詩集原本の表現を可能なかぎり忠実に再現するが、本アンソロジーの印刷技術上の制約(スペース、割付け、組み方)などによって、やむをえない場合(例Ⅱカット、横組み、活字の大小)は、これを統一する。

☆ できるかぎり既成概念によって詩人とその作品に触れることを避けるため、作品傾向別あるいはグループ別、また時期区分などによって編集することを止め、詩人名を五十音順に配し、それに従って、事典形式で編集すること。

(従って、例えば、第一巻は、阿部弘一にはじまり、長田弘に終わる、ア——オ音の詩人たちの作品が収録される。)

☆ 原則として、詩人一人について、四五〇行分の作品を収録する。ただし、作品の長さに応じ、重要なものは、それを超えてもやむをえない。また、みじかい作品がおおく、それによって充分その詩人の世界を理解できるとみなせば、四五〇行におよばなくてもよい。例外として、詩人の資質により、数篇の作品は特にすぐれていても、他の作品がその詩人の名を汚すようなものと考えられる場合は、かならずしも予定のスペースを配分しない。ただし、可能なかぎり編者の主観的評価を抑制し、よりおおくの秀作を〈展望〉に供する態度に終始すること。

*

さいわいにして、二百名をこえる詩人たちの協力を得ることができ、ほぼ右の趣旨にしたがって、編集を終えた。詩人各位にふかくお礼を申し上げたい。

別称するなら、「戦後詩人大事典」ともいえる画期的な出版物になったと自負している。これも、詩人たちの損得を忘れた協力と声援のたまものである。また、出版社の英断にも感謝しなければならない。願わくばこのアンソジ

―が、かけがえのない精神の遺産となり、いつまでもふりかえられるすばらしい眺めであるように。

ただ、一部の（それはごくわずかな人数であるが）詩人たちには、われわれの編集刊行の意図が充分理解してもらえず、作品の採録を拒まれたために、せっかくの事典形式に不完全な面が生じたことを、読者におわびしておかねばならない。また、二、三、テキストを手に入れることができなかったものがあり、採録すべき個々の作品について、あるいは〈展望〉の圏外に脱落した詩人たちのいることについて、さまざまな非難が発せられるかもしれない。その声々には、謙虚に耳を傾けるつもりであるが、われわれの客観的判断にも、編集能力にも、限界があり、相手が生きた作品であるなら、こちらの主観的評価も完全におし殺すことはできない。そのく、い、ち、が、い、の部分、は、どうしようもないと思う。われわれ編者もまた、後日、この〈アンソロジー〉を評価されることによって、充分罰せられるであろう。なお、協力を拒まれた詩人たちにも、さまざまな事情があり（詩人のプライドというやっかいな問題もあった）それらの詩人たちの作品は、他の出版社の刊行物によって補っていたくしか手はないのである。ともあれ、展望の道しるべは、右に記したとおりである。頓首九拜。

一九七〇年 秋

編者代表

嶋岡 晨 するす

戦後詩大系

I

目次

ア
イ
ウ
エ
オ

阿部弘一……………21

詩集「野火」から

秋

人

掌のなかの海

犬

橋

塔

死

ひばり

雪

安藤一郎……………33

詩集「経験」から

経験 117

詩集「遠い旅」から

遠い旅

死者

詩集「夢のあいだ」から

使者について

ある海景について

秘蹟について

家族について

蛇について

安東次男……………45

詩集「六月のみどりの夜わ」から

テルコとナナ

大古墳

女たちへの讃歌

シャン・ド・マルスの歌

詩集「蘭」から

死者の書

海戦

死刑宣言

安宅夏夫……………58

詩集「シオンの娘」から

112

詩集「ラマ・タブタブ」から

私は世界を尻の穴から見る

食事・反革命

快速調

安西均……………71

「安西均詩集」から

雨

西行

人麿

新古今集断想

天の網島

業平忌

十一月

明月記

小銃記

ひとみうた

朝の市場

朝、電話が鳴る

日光くさいベッド

神様のタクシー

葉の桜

花の店

会田千衣子……………82

詩集「鳥の町」から

一日

夏

不意に

鳥の町

笑い

鳥

町

詩集「背景のために」から

七年前と

失ったもの

亡命者のように

断片

町の別の感受の仕方

聖者の町

神秘

詩集「氷の花」から

天使

天使

病める子供

すわっている少年

町の少年

眠る少年

神話

少女

美神

黒薔薇

Vivre te……

花をもつ少年

あるダンサーに

秋

怯える少女

会田綱雄

詩集「鹹潮」から

或る日

一路平安

帰郷

大工ヨセフ

鹹潮

アンリの扉

聖母族

醜聞

伝説

鴨

詩集「狂言」から

ビエロタの市長

七月のキツネ

將軍の夜

赤木三郎

詩集「物語詩片」から

秋のジザベル

海からの音

話 戦争

足立巻一

詩集「夕刊流星号」から

雨

アルカッシャの森

逃亡

特別市の野ネズミ

ゆめのような話

てんぶら

詩集「石をたずねる旅」から

ワナ

川にさらされた野獣の家族

自然の質量について

墓

うずくまった巨人

石のおわり

秋谷 豊

詩集「冬の音楽」から

蟬

北国

湖のある村

幻の花

歳月

昼の月

終りし夏

夏の人

降誕祭前夜

漂流

読書

桜桃忌

遠い歌

夏の嵐

雪と岩と太陽

山小屋の電話

秋の遠方

秋村 宏

詩集「実用的研究」から

アメリカ兵は帰ってゆけ

祝婚歌

四人の大將

遅く生まれてくる

中小企業精神

タカツムリ

木

返品整理物語

夜のなかで

実用的研究

芦原修二

詩集「愛したの塔」から

快楽のしたたり

一九六七年夏

うじ虫になったベニス

天沢退二郎

詩集「朝の河」から

朝の河

RÉVOLUTION

旅の暮し

世直しパトロール

血の日曜日

詩集「夜中から朝まで」から

夜の旅

旅の夜明けに

ソドム

死刑執行官

詩集「時間錯誤」から

観察

さむい朝のはじまり

反動西部劇

天彦五男

詩集「鴉とレモン」から

なだれる六月

幻覚

白い鴉

レモン

蝶と花と果実

ブラム

漿果

未刊詩集から

ねむり

街

家

天野 忠

詩集「重たい手」から

最後の家族

死の骨

道

一九五二年春

帰るために出発する

戦死

詩集「単純な生涯」から

単純な生涯

破れたガラス

米

事件

詩集「しずかな人しずかな部分」から

何たる不覚

みみず

詩集「動物園の珍しい動物」から

叫び

絵画陳列場にて

あーあ

詩集「昨日の眺め」から

しずかな夫婦

古都

簡易食堂で老人がうたった

鮎川信夫

「鮎川信夫全詩集」から

橋上の人

死んだ男

撃船ホテルの朝の歌

消えゆく水平線

喪心のうた

荒川法勝

詩集「生物祭」から

時間

海の墓

鎮魂歌

禁断

生物祭

詩集「鯨」から

鯨工場の妄念

バスクの後裔

絵巻日本捕鯨法

井上俊夫

詩集「野にかかる虹」から

乳房

惣七家出一件

明和七年四月某日

雪の十字架

「未刊詩篇」から

紅花の記

通天閣

ふるえる一本の葦も

井上 靖

詩集「北国」から

狐銃

北国

野分(一)

野分(二)

さくら散る

十月の詩

詩集「地中海」から

落日

地中海

夏雲

珠江

天壇

明方

少年

詩集「運河」から

運河

川明り

雪

佐藤春夫先生の耳

海

楓林建国

雪

伊藤桂一

詩集「竹の思想」から

竹十章

詩人

竹

富士

鱒

存在

微風

灯

壮年

竹の歌

淵

悼詩

韓国のをみな

駐屯生活

中国を去るにのぞんで

伊藤海彦

詩集「黒い微笑」から

かぎりない別離のなかで

このとざされた庭園の

石井藤雄

詩集「野の声」から

野馬

わら山

馬

奇妙な日

石原吉郎

詩集「サンチ・パンサの帰郷」から

位置

事実

葬式列車

デメトリアーデは死んだが

脱走

最後の敵

耳鳴りのうた

ヤンカ・ヨジェフの朝

夜がやってくる

棒をのんだ話

足ばかりの神様

「石原吉郎詩集」から

花であること

点燭

石川逸子

詩集「日に三度の誓い」から

半蔵門にて

ボブラになるわけにはいかない

日に三度の誓い

詩集「狼・私たち」から

狼・私たち

石垣りん

詩集「私の前にある鍋とお釜と燃える火と燃える火と」から

天馬の族

薊

私の前にある鍋とお釜と燃える火と

その夜

詩集「表札など」から

シジミ

表札

くらし

幻の花

崖

鬼の食事

銭湯で

弔詞

唱歌

家出のすすめ

母の歌

246

234

256

287

276

268

乾

いざや たたえよ
いっちまった ぼく
ぼくはこわい
彼ら笑う
見捨てられた子供たち

礎村英樹

一九五六年十月十一月
一九五九年十二月
アメリカ交響楽
言葉について

317

定義
真面目で不幸な
基地の私生児
基地に冬がくる
帰還
南極では物は腐らない
嵐の中でいなくなった福島隊員
ラングホブデの氷山街
天幕の中
氷結

茨木のり子

詩集「対話」から
338

飯島耕一

象の墓場
処刑と証言
動物の馴致性について
ピエタ
貌
物体の落下について
ピカン
鉄橋
詩集「鉄橋」から

304

はじめのおんな
太陽の子
詩集「ゆきずりの愛」から
おれの嫌いなのは
蝶の女
埋られた彫像
癒合
詩集「水の女」から
水のこころ
水の女

大塚 堯

詩集「南極」から
南極の食いのもの
あざらし
五十日の夜
抽象の獣
海と罪人
搬家

328

入沢康夫

詩集「倅セトモ不倅セ」から
失題詩篇
倅セ フレトモ不倅セ
詩集「古い土地」から
死者の日

347

詩集「何処へ」から

われわれにとってのことば
言葉について
思い出された村
理解
死人の髪
霧
血について
行列
埃まみれの空
空

詩集「何処へ」から
われわれにとってのことば